

# TOPIC

## SDIC Q&A版

No.170

2016年10月

発行 スズケン医療情報室

弊社医療情報室(スティック **SDIC: Suzuken Drug Information Center**)に寄せられているお問合せの中から、  
「小児の薬の飲ませ方」について取り上げます。

### Q1. 小児(乳幼児期)の薬の飲ませ方を教えてください。

A1. 小児の場合、決まった方法でどの子も薬をうまく飲むことができるというものではなく、たくさんのバリエーションを用意して、その中からその子に合った方法を選択するという意識をもって対応する必要があります。もう一つは保護者と一緒に「飲ませる必要性」と「飲ませやすい方法」の双方について考え、わかりやすく説明することが、小児の服薬アドヒアランス向上には重要です。以下に一般的な飲ませ方について紹介します。

#### ★水剤・シロップ剤の飲ませ方★

手順

- ① 手をきれいに洗います。
- ② 薬の容器を振り中身を均一に混ぜます。
- ③ 1回分の量を添付のカップやスポイトで量り、何回かに分け少量ずつ、すべて飲ませます。  
 ✓ **スポイトを使う場合**  
 口の中央でなく、口の端側から入れて、舌に当てないように頬の内側から奥の方に、ゆっくり流し込みます。  
 ✓ **スプーンを使う場合**  
 薬を吐き出してしまうことがあるので、1回分を少量にして数回に分けて飲ませます。  
 ✓ **哺乳瓶の乳首を使う場合**  
 哺乳瓶を使用する乳児の場合、空の乳首に薬を入れて吸わせませます。  
 先に乳首だけをくわえさせ、吸い始めたら薬を入れるとこぼさずに飲ませることができます。
- ④ 薬を飲んだ後は水や白湯(さゆ)などを飲ませます。
- ⑤ 服用後、薬を子供の手の届かない冷蔵庫などの涼しい場所に保管します。
- ⑥ 使用したカップなどは洗って、乾燥させて清潔に保ちます。



#### 《注意事項》

- 薬の入った容器を激しく振ると泡立ち、正確な計量ができなくなるため軽く振り混ぜるようにします。
- ふたや容器から直接飲ませると、正確な量が飲めなかったり、容器に雑菌が入ったりするので避けます。
- スポイトやスプーンは、のどの奥に入れると咳き込みやすいので気を付けます。
- 誤嚥防止や薬をこぼさないように、横抱きもしくは上体を起こして飲ませます。



#### ★粉薬(散、細粒、顆粒、ドライシロップなど)の飲ませ方(主に新生児～幼児)★

手順

- ① 手をきれいに洗います。
- ② ✓ **水や白湯(さゆ)に溶かす場合**(「水剤・シロップ剤の飲ませ方」も参照)  
 1回分の薬を飲みきれの量の水(小さじ2分の1杯(2.5cc)程度)に溶かし、哺乳瓶の乳首やスポイト、スプーンを使ってなるべく口の奥の方に流し込むようにします。  
 ✓ **団子状にする場合**  
 1回分の薬を小皿やスプーンなどに出して、1滴ずつ水を垂らし、垂らしては混ぜることを繰り返し、団子状や泥状に練って、清潔な指で、苦みを強く感じにくい頬の内側や上顎に塗り付けます。
- ③ 口の中に薬が残ると苦みが出ることもあるため、薬を飲ませた後で水や白湯などを流し込むように飲ませます。
- ※ **粉薬がどうしても飲めない場合**  
 アイスクリュームや服薬補助ゼリーなどに混ぜる方法もあります(Q2参照)。



#### 《注意事項》

- 時間がたつと薬の味が変わったり、効き目が弱くなることもあるので、飲む直前に溶かし、溶かしたらすぐに飲ませます。
- 溶かす水の量が多いと残す可能性があります。飲み残しがないように気を付けます。
- 舌の上に薬がのると、味を感じてしまうので、直接舌の上にはのせないように気を付けます。
- 飲食物に混ぜる場合は食べきれの量、薬によっては混ぜてはいけないものがあるので注意が必要です。  
 また、薬をミルクやご飯に混ぜると、味が変わり、ミルク嫌いや食事嫌いの原因になるため避けます。

## Q2. そのまま薬が飲めない場合、どのような工夫がありますか？



A2. 新生児や乳児期には薬を口に入れること自体が難しいことがあります。このような時に使用しやすく、薬用量を測るにも便利とされているのは、服薬補助器具（注入器）です（右参照）。また、薬の苦みや舌触りなどを嫌がる場合には、以下の表1にあるような飲食物や服薬補助ゼリーなどが用いられます。

～注入器タイプの主な商品～  
 ・スポイトくすりのみ（ビジョン）  
 容量 5mL  
 ・ベック・ドゥ（スズケンなど）  
 容量 2、5、10mL

表1. 飲食物などを使った服薬の工夫

| 食品例                            | 特徴                                                                                                                    |
|--------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| アイスクリーム                        | 味が濃く、味をマスクしやすいとともに、冷たいので味覚を麻痺させる。                                                                                     |
| コンデンスミルク（練乳）、砂糖、単シロップ、水あめ、ハチミツ | 甘味が強く粘りがあるので、薬の食感や味をマスクしやすい。ただし、ハチミツは1歳未満の乳児には乳児ボツリヌス症の危険があるため避ける。                                                    |
| チョコレートスプレッド、ココア                | 味が濃く、特に苦みの強い薬をマスクしやすい。                                                                                                |
| バナナ                            | 香りも強く味やにおいをマスクしやすい。ペースト状にして薬を挟み込むようにするとよい。                                                                            |
| プリン                            | 甘味が強く、カラメル之苦みにより苦みのある薬をマスクすることもできる。                                                                                   |
| 味噌汁、ポタージュ、のりの佃煮                | 甘味を嫌がる場合に適している。                                                                                                       |
| ヨーグルト                          | 混ぜると苦みが出たり、薬効が低下するものもあるので注意が必要。                                                                                       |
| 市販の服薬補助ゼリー                     | ゼリーと薬を混ぜるのではなく、ゼリーで薬を包み込み、苦みやにおいをマスクし、飲みやすくすることができる。製品により pH に違いがあり、特にマクロライド系抗生剤では pH が中性のものを選択する。                    |
| カプセル、オブラート                     | 粉薬は苦手でもカプセルなら飲めるという場合は、カプセルやオブラートに粉薬を入れて服用させる。オブラートは口腔内に付着して飲みにくかったりするため、服用時に、外側を水に浸し、とろみをつける。袋状やフルーツ味のオブラートも市販されている。 |

## Q3. 小児の服薬指導を行う上で踏まえておくべきポイントを教えてください。

A3. 小児は、生後から数年の間に劇的なスピードで成長し、それに伴い服薬に関連する能力も変化してきます。小児を一括りにするのではなく、それぞれの時期の気持ちや意思を尊重し、特徴を理解した上で服薬指導・薬学的管理を行う必要があります。以下に発育段階に応じた服薬に関わる特徴についてまとめます。

表2. 発育段階に応じた服薬に関わる特徴

| 年齢                              | 特徴                                                                                                                                                                                                                     |
|---------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 新生児期（生後～1ヵ月未満）<br>乳児期（1ヵ月～1歳未満） | 味覚が十分に発達しておらず、味で服薬を嫌がる例は少ない。満腹で飲めなかったり、食べ物と一緒に吐いたりすることがあるため、薬の特性上の問題や特別医師の指示がない場合は、授乳や離乳食の前の方が服用させやすい。この時期は寝ていることが多いため、無理に起こさず起きた時に服用させる。泣いている時も無理に服用させない。                                                             |
| 幼児期（1～5歳）                       | 味覚も多様化し、自己主張をするようになる（特に2～4歳頃は、第1次反抗期（いわゆるイヤイヤ期）も重なる）。様々な理由で服薬を嫌がるが増えてくる。薬の味の好みも幼児ごとに異なってくるため、服薬に向けた工夫が必要となる。基本的には薬を水や白湯で服用する習慣をつける。                                                                                    |
| 学童期（6～12歳）                      | 服薬に対しての理解と自覚も出てくる。保護者への説明だけでなく、本人へも服薬指導を行うことで、服薬アドヒアランスが高まるようになる。年齢や理解度に応じて情報量を考慮する。説明は口頭のみでなく、イラストを豊富に加えた説明書を活用する。この年齢から、粉薬やシロップ剤よりも錠剤が服用しやすい剤形になってくる。錠剤を初めて試す時は、小さいサイズや割線のある錠剤で半錠から試す。錠剤服用の練習にはラムネ菓子やキャンディーなどが用いられる。 |
| 思春期（13～17歳）                     | 理解度はあるが多感な時期であり、説明時の内容や表現には配慮が必要となる。薬の管理は本人にも任せられるので、自覚を持って対応できるように指導することが大切である。                                                                                                                                       |

### ＜飲ませる際に配慮すること＞

- ・薬は決しておいしい食べ物ではなく、治療のために必要なものということを伝える。  
 「美味しいから飲もうね」という言い方は避け、「病気を治すために必要なもの」として飲ませる。  
 苦い薬を甘いとうそをついてしまうと信頼関係に関わるので気を付ける。
- ・無理やり飲ませるといふ必死さが顔に出ないように気を付ける。  
 「病気を治そうね」「元気になろうね」と声掛けも効果的な場合が多い。
- ・やむを得ず強制的に飲ませる場合も本人の自尊心を傷つけないように配慮し、安全で確実な方法を試みるよう努力する。
- ・飲めた時は、十分に褒め、自信を持たせる。飲めなかった時はあまり叱らず、飲んでくれなくて残念ということ伝える。

（参考文献）

- 1) 小児内科 42(増刊)59-63 '10
- 2) 小児科領域の薬剤業務ハンドブック 66-74、216-223 '08
- 3) 臨牀と研究 86(4)6-12 '09
- 4) 日本薬剤師会雑誌 61(10)55-58 '09
- 5) 日経ドラッグインフォメーション(プレミアム版) PE004-012 '16
- 6) 薬局 63(3)103-108 '12
- 7) 薬事日報 (11480)4-5 '14
- 8) TOPIC SDIC Q&A 版 No.13 '03

内容の最終確認は参考文献等でお願ひします。尚、弊社では、参考文献の複写サービスは行っておりません。